

親鸞仏教センター通信

2008.
June

2008年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第26号

安心ということ

親鸞仏教センター研究員 山本伸裕

安心して暮らせる社会を築くことは、長きにわたって人類が追い求め続けてきた悲願でもある。安全、あるいは安心をもたらす技術やシステムという点でいえば、現代の社会は格段に進歩してきたといってよい。にもかかわらず、食生活や住環境、エネルギー供給から防衛システムに至るまで、安全・安心にかかわる話題がマスコミなどに登場しない日はないというのはどういうわけなのか。

「自力門の安心は軽く、他力門の安心は重い」(『宗教哲学骸骨』)というのは、清沢満之の言葉である。技術やシステムといったものは、人間知による自力的な創意工夫の所産にほかならない。実際、技術やシステムがもたらす安心は、案外、脆弱なものである。それらが絶対的に完成されたものでない以上、技術やシステムへの信頼から導かれてくる安心もまた、絶対的なものでないことはいうまでもない。

はたして絶対的安心が獲得されるなどということが、現実により得るだろうか。清沢が「他力門の安心は重い」というとき、そこに表白されているのは、「自力無功」の感得であり、ここには無限＝絶対なるものに対する全面的な信の裏づけがあるのである。

この場合の「信」とは何であるか。それは、この卑小な自己という存在をひっくり返して、天地間(宇内)のあらゆる存在は、無限＝絶対なるものはたらきのうちにあるもの、無限＝絶対なるものの一部をなすもの、という確信である。

いったん、そうした信念を獲得した者は、何がどうあれ、たとえその身が如何なる状況下に置かれているとしても、自己の境遇をありのままに絶対のあらわれと受け止める心のあり方に立ち返ることができる。言い換えれば、自己の一切のはからいを超えて、世界の側から安心が与えられることになるのである。このような心のあり方をこそ、境遇や状況に左右されないという意味で、絶対の安心と呼ぶことができよう。

現代社会にあって、不安がなお根強く覆いつづけているという事実は、昨今の自殺者の急増によっても証明されている。もとより、人間はどこまでも限りある身を生きている存在である。そうである以上、その過程で出遭うさまざまな不安を完全に払拭することはできないであろう。ただ、自己存在についての確たる信念が獲得され、いささかなりともそこに足場を見いだすことのできる者は、自己という存在が、無限のはたらきのうえに「落在せる者」とであるという絶対の安心に、いつでも立ち帰ることができるのである。

これはほかならぬ宗教の安心である。私たちはそうした宗教のもたらす安心というものを、いまいちど真剣に考え直してみるべきではないのか。現代を覆う不安の根源を考えるにつけ、私はその必要性を強く感じさせられるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑥

人生最高の生き方—愚に帰る—

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第13回と第14回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第13回では、「如来^{じゅうろう}の十号^{じゅうごう}」について、第14回では、「歎^{たん}仏^{ぶつ}偈^ぎ」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第11回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 愚に帰る

この間、ある出版社から私に「文章を書いてほしい」という依頼が来まして、私は「そういう文章は苦手だから」と、さんざん断ったのですけれど、どうしても書けと。では「何という題で書くのですか」と聞きましたら、「人生最高の生き方」という、何かすごい題なのです。そういう題で書いてほしいと言うのです。

「人生最高の生き方」とは何だろうと。それは確かに、私も若いころは、人に勝っていこうなどという野心をもったこともありますし、何とか少しでもましになろうなどという、ばかげた心を起こしたこともありましたが、長い間、親鸞聖人のお言葉を教えとして生きてきますと、一番難しいのは、法然上人が言われた「愚に帰る」ということだと思うのです。

つまり、もともと^{おろ}愚かなのだけれど、それを自覚することが難しい。丸裸の愚かさになるといことが、一番難しい。愚かさを隠して、できるだけそのうえに何かを乗せて、愚かではなくなろうとする。愚かのうえに愚かを重ねる、そういう愚かの2乗みたいな愚かさを、われわれは一生懸命に生きている。その愚かであるということに帰れるということが、本当は一番楽

だし、一番存在が輝いて自由であると。「ああ、そうだな」と。最高の生き方とは、「愚に帰る」ということだと。そういうふうに考えて、この題（「人生最高の生き方」）はありがたいと思って、短い文章を書かせてもらったのです。

この『無量寿経』に、「今日、世英^{せえい}、最勝の道に住したまえり」（『真宗聖典』7頁、東本願寺出版部）とありますが、「最勝の道」というのを見ると、どうしても私どもは、何かみんなやっつけて、俺一人が勝ち残る、そういうふうになるのだろうと、こう見るわけです。でも、そうではないのです。「世英」、つまりお釈迦さまが勝ったのは、自分に勝ったのです。自分に勝ったということは、自分の妄念に負けない方向性を見いだしたということだと思うのです。自分に勝ったというのは、自分の無知、自分の無明^{むみょう}、自分の本当の愚かさを自覚して、真理に帰った。真理と言っても、自分に執着すべきものはなかったという、無我^{むが}と言われるようなものです。因縁の賜物で、ここにたまたまある。たまたまあることの尊さ、それを偉いのだと思い込むこととは違うわけです。

どうしてもわれわれは、教えの言葉を求めたり、本を読んだりするときに、もとの愚かさの自覚ではなくて、それに何か智慧を乗せていこうという発想で行うわけです。そういう発想で、聞いたり考えたりしようとするから、やればやるほどわからない。結局、わからない方向で尋ねているから、わからないのです。ところが、わかるわからないを超えて、愚に帰るといような大切な方向があるのだということに気づいてくると、仏教の歩みが始まる。では、そ

の歩みの極限はあるのか。極限はあるのかもしれないけれど、そこに行き着く必要はない。必要はないし、行き着かなくても、その極限の方向に向かって歩みが始まれば、それで十分人生の意味が見えてくる。私は、そう思います。

確かに親鸞聖人は、「愚^ぐ禿^{とく}鸞^{らん}」と名^な告^つられた。その帰るべき愚かさに向かって歩まれていくなかで、親鸞聖人がなさったことは、最高の智慧と理性と論理をもって、仏教の最高の問題を考え抜くということだったわけです。だから帰るべき愚かさというのは、いわゆる相対的な愚かさではない愚かさです。比較して愚かになるのではなくて、根源的愚かさを自覚するわけです。そのためには、どれだけ歩んでも終わりがありません。そういうように、本願の教えをとおして、本当に愚かさに帰る道をつけてくださった。では、帰れるかというと、容易なことではありません。容易なことではありませんけれど、その方向性が見えてくるわけです。

■ 世間を生きる

「五^ご濁^{じやく}惡^{あく}世^せ」と言われるような、罪惡深^{じんじゆう}重^{じゆう}の衆生が共に生きている場所、自我の煩惱が重層的に積み重なった空間が、われわれが生きている世です。お互いに愚かさを生きているという、この抜き差しならない場所に立って、しかも勝つというようなことがはたして可能なのか。これは難しい。だから、逃げ出したくなるわけです。どこか世の外へ出て行ってたすかるような発想、そういう方向性で仏教が理解されてしまうのは、結局、仏教を求める者の立場が本当に確立できていない弱さであると思うのです。

なるほど、出世間的な方向で呼びかけるということ、それは無意味ではない。確かに、世間のなかだけで勝ち抜く方法が知恵だという誤解がありますから、ある意味でこれを突き抜ける方向へ呼びかけるために、「出^{しゅつ}世^せ間^{けん}」という言葉は意味をもつわけです。もつのだけれど、文字どおり出て行くという方向に真理があるのではなくて、むしろそこから帰ってくる。われわれは、世間を生きているわけですから、生きて

いる場であり、生きている環境であるこの世間というものを本当に見直すことができないなら、自分を見直すこともできない。世を捨てて、自分だけ逃げ出してたすかろうとするような自分なら、結局、逃避心に負けた自分ですから、世を大地にして生きる本当の存在になることはできない。

私は心弱い人間で、どうしても逃避心から脱却できない人間ではあるのですが、しかし、この『無量寿経』の教えというものを本当にいただいて歩んでみると、どっちみち逃げても逃げられないし、愚かさとか弱さというものは、自分一人だけではない。この世を生きるみんなが、そういう命をお互いに生きていて、この世をいっしょになって汚れているのであり、だからこそ、その場所で、本当に生き抜くべきであると。それが成り立つ教えとして、この『無量寿経』が説かれた。こういうふうに親鸞聖人はご覧になって、「末^{まつ}法^{ぽう}濁^{じやく}世^せには、この道一つだ」と教えてくださった。この教えを説くためにお釈迦さまはこの世に生まれられた、出世本懐の教えだと。そういうふうに見られたということは、非常に大事な意味があると思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」の講演録（全47回分：2001年11月～2006年8月）が、3巻本として出版されました。問い合わせと申し込みは、樹心社（TEL 042-577-2778）まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年6月17日(火)午後6時30分～9時
7月22日(火) 同 上
8月29日(金) 同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大 ¥3,500、小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

御みなは、よろずの如来にょらいの名号みょうごうにすぐれたま
えり。これすなわち誓願せいがんなるがゆえなり。
「甚分明じんぶんめい」というは、「甚」は、はなはだと
いう、すぐれたりというところなり。「分」
は、わかつという、よろずの衆生しゅじやうごとにとわ
かつところなり。「明」は、あきらかなりと
いう、十方一切衆生じつぱうしつじやうしゅじやうを、ことごとくたすけ
みちびきたまうこと、あきらかに、わかちす
ぐれたまえりとなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四七—五四八頁)

語 註

- ①『五会法事讃』詳しくは、『浄土五会念仏略法事儀讃』という。唐の法照ほうしやうの撰。親鸞の主著、『教行信証』「行巻」に多く引用されている。この文は、『教行信証』「行巻」(『真宗聖典』一七九頁)、『唯信鈔』(同九一八頁)に引用される。
- ②「不可称・不可説」『一念多念文意』では、左訓として「不可称」に「コトバモオバズトナリ」、「不可説」に「トキツクスベカラズトナリ」とある。

試訳をめぐって

【原文】「一切衆生をして
無上大般涅槃にいたらし
めたまう」

【現代語訳】「生きとし生
けるすべてのものを、こ
のうえない本願のはたら
きに導き入れる」

到底できないものである。そして、それは生き
とし生けるすべてのものを、このうえない本願
のはたらきに導き入れる御名である。しかもそ
れは、限らない慈悲で、たすからない衆生をた
すけずにはおかまいという、誓いの御名であ
る。この阿弥陀仏の御名は、他の一切の如来の
名号をはるかに超えてすぐれている。なぜな
ら、その御名は、いのちあるすべてのものを救
いとうろという、誓願そのものだからである。
「甚分明」の「甚」は、「はなはだ」というこ
とであり、「すぐれている」という意味である。
「分」は、「分ける」という、つまり、あらゆ
る衆生一人ひとりに分け与えるという意味であ
る。「明」は、「あきらかである」という意味で
ある。つまり、「甚分明」というのは、あらゆ
る世界の生きとし生けるものを、決して漏らす
ことなく、たすけ導いてくださるということが
明らかであり、ことのほかすぐれておいでにな
るということである。

「大般涅槃」とは、「すぐれた完全なまじりの境地」と、しばしば訳される。それは、修行によつてもたらされる個人体験としての特殊な心理状態、というように了解されることがほとんどである。

親鸞は、『教行信証』の中で第十一願「必至滅度の願」を、『証大涅槃の願』(『真宗聖典』二八〇頁)と表現している。本願が一切衆生に与えようとする涅槃、それこそが親鸞のいただいた「大涅槃」である。それは、単に終着点ということではない。「涅槃に入る」ということは同時に、「はたらきだす」ということであり、その意味において、「涅槃」とはあらゆるものを生み出す起点でもある。『涅槃』に一切衆生を至らしめようというのが本願であり、至らしめてなお、衆生のうえにはたらし続けようとする「このうえない本願のはたらき」を、親鸞は「無上大般涅槃」と呼ぶのである。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

『anjali』第15号および

『現代と親鸞』第15号を刊行

このたび、情報誌『anjali』第15号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第15号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第15号では、科学者の花輪公雄氏(ホームページ掲載)、精神科医の香山リカ氏、政治学者の小熊英二氏、元上越教育大学学長の松野純孝氏、詩人の江口季好氏、脳科学者の茂木健一郎氏、教育学者の西澤晃彦氏、ジャーナリストの田畑光永氏、神学者の八木誠一氏など、11名の専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題について、ご執筆いただいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第15号では、研究論文(山本伸裕研究員)のほか、「現代と親鸞の研究会」からイスラーム学者の池内恵氏、「英訳『教行信証』研究会」からロンドン仏教協会副理事の佐藤平顕明氏、「テーマ別研究交流会」から哲学者の花崎皋平氏の講義と質疑。また、第5回「親鸞仏教センターのつどい」から本多弘之所長の講演。さらに、「親鸞思想の解明」から本多弘之所長の問題提起(4講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

煩^{わづ}わしさから解放されて、こころ穏やかに生活したい。誰しも一度は、そう思ったことがあるだろう。しかし、その煩わしいと感じる気持ちや不意に襲ってくる存在の不安を、ただグッとこらえて、日々営みを繰り返す。それが私たち一人ひとりの偽らざる日常ではないか。それは寂しさでもあり、痛みでもある。それ、生死をはなれ、仏道をならんとおもわんに、ふたつのみちあるべし

（聖覚著『唯信鈔』『真宗聖典』九一六頁）

いま、『唯信鈔』の冒頭に置かれたこの文が、そのやり切れない日常に重なる。いついかなる時代も、人は身をすり減らしながら懸命に生きている。その切実なる場において成り立たない仏道としたら、それは生きていくうえでただ邪魔なだけである。そこに、『阿弥陀』という言葉にまでなつてはたらく如来が名告りてくる。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳②

原文

「如来尊号甚分明 十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎」^①（五会法事讃）。「如来尊号甚分明」のこのころは、

「如来」ともうすは、無碍光如来なり。「尊号」ともうすは、南無阿弥陀仏なり。「尊」

は、とうとくすぐれたりとなり。「号」は、仏になりましたもうてのちの御なをもうす。

「名」は、いまだ仏になりましたまわぬときの御なをもうすなり。この如来の尊号は、不可

称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかいの御なり。この仏の

現代語訳

「如来尊号甚分明 十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎」^①（『五会法事讃』）。

「如来尊号甚分明」という言葉の意味は、次のとおりである。「如来」というのは、無碍光如来（阿弥陀如来）のことである。「尊号」というのは、如来の名号である南無阿弥陀仏のことである。「尊」とは、尊くすぐれているということである。「号」とは、仏に成られた後の御名をいうのである。（ちなみに、名号の）

「名」とは、いまだ仏に成られていないときの御名をいうのである。この阿弥陀如来の尊号は、本当は言葉で言い表すことも、説き尽くすことも、われわれの考えで思い当てることも、

親鸞仏教センターの動き

（2008・3・5）抄出

■2008年

- 3・1 「現代と親鸞」第14号、「親鸞仏教センター通信」第25号を発行。
- 3・3 第91回研究会議（研究・交流・出版）
- 3・4 第92回英訳「教行信証」研究会
- 3・5 第3回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く―法然の世界―（選択本願念仏集）を讀む」①3/5 ②3/12 ③3/19 ④3/26（文京区・東京大学仏教青年会館）
- 3・14 親鸞聖人ご命日のつどい
- 3・25 第10回ブックレビュー委員会
- 3・25 第68回清沢満之研究会
- 3・27 第14回（通算・第65回）「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3・27 第69回清沢満之研究会「『自己』とは何ぞや」という問いをめぐる―「無限の因果」からみた清沢満之の二種回向論」大谷大学大学院特別任用教授・長谷正當氏（文京区・東京大学ガデンパレス）
- 4・1 羽塚高昭研究員が大谷大学非常勤講師（仏教学）に就任。
- 4・1 人事発令（常規聴研究員、楠宏生研究員、大谷一郎囑託研究員が発令。田村晃徳が囑託研究員として再任）
- 4・4 親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・4 第35回現代と親鸞の研究会「現代における仏教の役割―葬式仏教再考―」山形大学教授・松尾剛次氏（千代田区・アルカディア市ヶ谷）
- 4・11 第6回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「成熟の意味」大阪大学総長・鷲田清一氏、「聞に死し、光に生きん」横超の時間構造―親鸞仏教センター所長・本多弘之（千代田区・学士会館「本館」）
- 5・7 第15回（通算・第66回）「親鸞思想の解明」連続講座（東京国際フォーラム）
- 5・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・15 第1回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 6・1 「聖典」第15号、「現代と親鸞」第15号、「親鸞仏教センター通信」第26号を発行。

現代と親鸞の研究会・第27回

現代人の生命観と スピリチュアリティ

大正大学人間学部教授 弓山達也



弓山達也 氏

2007年8月23日、アルカディア市ヶ谷（千代田区）において、大正大学人間学部教授の弓山達也氏をお迎えして、「現代と親鸞の研究会」を開催した。そもそも、今日語られているスピリチュアリティとは何であるのか、そして、現代社会においてスピリチュアリティはどのように浸透しているのかについて、特に、スピリチュアル教育における生命観と宗教に着目して、弓山氏に問題提起をしていただいた。ここにその一部を紹介する。（囑託研究員 本多雅人）

■ スピリチュアリティブームとその危険性

「スピリチュアリティとは何か」と言ったときに、一つには現代的な宗教性のことを指しています。しかも、その現代的というのは、教団不在、つまり「世俗化」という言葉で申し上げていいかもしれません。教団が社会的な影響力を失っていくなかで、なおかつ求められているものを「宗教性」と呼ばせていただくと、この宗教性のことを「スピリチュアリティ」と呼び、また宗教を介さなくても、自己を超えた何者かとつながれるのであれば、それを宗教ではなくスピリチュアリティと呼ぼう、ということだと理解していいでしょう。しかしながら、教団不在の宗教性で、人間が本当に自分を超えたものとつながっていけるかどうかということは、人類史的なというか、人間文明上で、簡単に答えが出るような問題ではないだろうと思います。

日本では、神や法ということも多少はありま

すが、それよりも、本当の自分とのつながりであったり、また自己と友人とか、家族とか、自分と何者かがどうつながっているのかということが主流で、超越性とはほとんど関係のないところでスピリチュアリティが語られているように思います。

現在のスピリチュアルブームの危険性は、スピリチュアルというマーケットを展開しているということです。1年間に全国で数十回開催されるスピリチュアル・コンベンション（癒しとスピリチュアルの大見本市）は、その萌芽を十分に孕んでいる一大マーケットになりつつあります。人びとは、欲望をかき立てられてスピリチュアルを獲得するために投資をして、市場が広がって、さらに欲望が拡大され、飽くなく消費と欲望のサーキットのなかに身を投じていくことになっていきます。

このことは、スピリチュアルというものが人間の生命のつながりとか、生命の連続性に関わっているとするならば、すでに人間の生命自体がマーケットの商品になってしまっているということなのです。それは、脳死・臓器移植とか臓器売買とは違った形の、目に見えないかたちでの売買で、目に見えないからこそ、市場は無限に広がっていくという問題を十分に指摘していかなければならないと思います。

■ 一面的生命観と宗教

スピリチュアルブームの問題点について考えていきますと、今回のテーマの一つになっている生命観が大きく変容したことが挙げられると思います。生命観の変容という背景には、高度

な管理社会における生命の操作とそれに対する揺り返し、カルトにおける生命の終焉（死）や断絶（つながりの否定）の強調とそれに対する揺り返しなどが挙げられます。私が憂えていることは、このスピリチュアルブームが教育の現場でも始まっているのではないか、ということです。

『こころのノート』（文部科学省）は、国によるスピリチュアル教育の典型例であると考えています。文科省のいう、「目に見えないものを大事にする」とか「あらゆる宗教に共通する普遍的な宗教心」という文言こそ、まさにスピリチュアリティと呼べるわけです。具体的な、宗教ではない普遍的な宗教の文言が、『こころのノート』の中にはちりばめられています。そこで「いのち」観とは、生命は自分のものであるが、与えられたという意味で、自分のものだけでないという「与えられたいのち」観、人間の生命は、宇宙や自然や人間を超えた大いなるものと「通じ合ういのち」観、そこで「いのち」は、輝かせることが使命・目的とされる「輝くいのち」観です。

問題なのは、いのちに対する苦悩、そして不条理ということが徹底的に排除されてしまっていることです。ですから、きわめて一面的な世界観、人間観が展開されています。また、形のうえでは宗教が扱うであろう、人間を超えた大いなるものの存在に対する省察に向かわせるような教材になっていても、なぜこれが平板で一面的かという、宗教が介在していないからだと思います。多くの場合、宗教は人間の苦悩やその闇、生きづらさや救われなさに目を向けて、そこからどのようにそれを超え、また超え出たものとつながっていくのかという道筋を示してきました。その宗教を抜きにして、超越的なものと結びつこうとしたときの、ある種の危険性とか、きわめて空虚な一面性というものを、官製のスピリチュアル教育の教材は見事に示しているのでしょう。その点こそ、『こころのノート』は批判されなければいけないと考えています。

しかし、批判するのは簡単です。そこで私は、「公教育に宗教性をもち込めばいい」と提案したいのです。すでに行われている教育のなかに、宗教を再発見することがスピリチュアル教育です。平和・いのち・環境に関わる教育において、宗教性をめぐる教材は揃っていますから、後は宗教者がどうやって関わるかということだと思います。

スピリチュアルが宗教の土台である、と鈴木大拙が言い、しかもその土台が崩れているから、土台から作り直さなくてはいけないというのであれば、超越性をわれわれの文化のなかに確保し、取り戻していく回路、ツール、メカニズムを通じて、教育の現場に貢献していくことを、宗教者・宗教研究者も含めて考えていかなければならないことだと思っています。

（文責：親鸞仏教センター）

※弓山達也氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第16号（2008年12月1日号）に掲載予定です。

弓山 達也（ゆみやま たつや）大正大学人間学部教授
1963年、奈良県に生まれる。86年、法政大学文学部哲学科卒業。91年、大正大学大学院博士課程後期単位取得退学。博士（文学）。宗教社会学専攻。新宗教や現代世界における霊性の問題、若者の宗教観、宗教意識などをテーマに研究を進めるとともに、〈癒し〉〈自分探し〉〈霊性〉などをキーワードに、現代宗教などの調査を行う。著書に『天啓のゆくえ—宗教が分派するとき』（日本地域社会研究所）、共著に『祈る ふれあう 感じる—自分探しのオデッセー』（IPC）、共編に『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求』（世界思想社）、『癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ』（専修大学出版局）、『癒しと和解—現代における CARE の諸相』（ハーベスト社）、責任編集に『現代における宗教者の育成』（大正大学出版会）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

朝日カルチャーセンターの「公開講座『歎異抄』を読む」(協力:親鸞仏教センター)が開催される

東京・新宿の朝日カルチャーセンター(新宿住友ビル7階)では、「公開講座『歎異抄』を読む」が開催されています。講師には、親鸞仏教センターの本多弘之所長があたり、今年で4年目を迎えます。今回の「春の講座」は、4月10日、24日、5月8日、6月12日、26日の開催です。

去る、4月10日、その1回目にあたる講座を取材しました。

会場のある新宿住友ビルは、正面に東京都庁を、周囲には超高層ビルの建ち並ぶ新宿副都心の中心に位置しています。東京メトロ大江戸線の「都庁前駅」から戸外に出ることなく教室に行けるという、交通の便もよい立地条件にあります。十数名の参加者が受講されている教室は、ゆったりとした緊張感のある雰囲気、講義が始まると、受講者全員が「真宗聖典」(東本願寺出版部刊)を開き、熱心に聴講されていました。

関係者の話では、この講座には、初めて仏教の言葉に触れる人から、長年『歎異抄』に親しんで来られた方まで、毎回、十数名の受講者があり、年齢はいわゆる団塊の世代の60歳代が多いとのこと。また、近年の受講希望者の傾向として、老・病・死と真向かいにならざるを得ない日々の生活のなかで、どのように生きていけばいいのか、その生き方を模索される方々のお問い合わせや反響が多いとのこと。

次の「夏の講座」は、7月10日、24日、8月28日、9月25日の全4回が予定されています。

※お問い合わせとお申し込みは、朝日カルチャーセンター 新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル7階(TEL 03-3344-1945 担当:米山)まで。



講座風景(新宿区・朝日カルチャーセンターで)

●センター新スタッフの紹介

客員研究員 マーク・L・ブラム (Mark L. Blum)

1950年米国ロサンゼルス生まれ。カリフォルニア大学バークレー大学院博士課程仏教学科修了。文学博士。ニューヨーク州立大学アルバニ校東洋学准教授。ハーバード大学ライシャワー日本研究所研究員、東京大学仏教研究員、大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員。

研究員 常塚 聡

1973年石川県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学(宗教学)。元センター嘱託研究員。

研究員 楠 宏生

1980年北海道生まれ。大谷大学大学院文学研究科博士課程満期退学(仏教学)。

嘱託研究員 大谷 一郎

1964年埼玉県生まれ。早稲田大学商学部(日本経済論)卒業。元株式会社東急百貨店東横店人事エキスパートスタッフ。社会保険労務士。

あ と が き

親鸞仏教センター研究員の羽塚高昭氏が、2008年4月1日付で大谷大学講師(非常勤)に就任した。氏は、専門のパーリ語仏典を研究しつつ、英訳「教行信証」研究会を主宰。同じく研究員の 嵩 海史氏は、『anjalī』を担当し、テーマ別研究交流会を主宰した。昨年退任の伊東恵深氏(大谷大学講師(非常勤))とともに、3名は第二期3年間の任期中、精力的に研究課題に取り組まれた。その間、伊東氏は博士(文学)の学位授与と真宗大谷派の学階である擬講の授与を、羽塚氏は博士(文学)の学位を授与され、また嵩氏は擬講論文を書きあげられた。そしてこの4月からは、新たに常勤研究員2名(上記紹介の常塚、楠両氏)を迎え、第三期(7年目)の研究員体制が整った。ここ首都・東京で、自らの研究課題を、実存関心をもって積極的にぶつかってほしいと願っている▼親鸞仏教センターが5年半の歳月をかけて取り組んできた『歎異抄』現代語訳(本紙、創刊号から第22号に紹介)に関して、昨秋来、新聞各紙に取り上げられ、大きな反響があった。『歎異抄』—今の視点で読み解く—親鸞の思想が肉声として伝わる『歎異抄』は、日本では聖書に比されるベストセラーである。親鸞思想を現代的な視点から読み解く動きが加速している(日本経済新聞、2007年12月29日)、『歎異抄』思いっきり現代語訳—今に通じる生きるヒント—読みやすさを目指すだけでなく、現代に通じるメッセージを問い直すという試みだ。それは社会の変容を強く意識したものとなっている(朝日新聞、2007年9月22日)と▼これまでも多くの『歎異抄』の現代語訳が出版されている。最近では、「私はこう感じ、このように理解し、こう考えた、という主観的な現代語訳である」(『まえばき』から)と述べる作家・五木寛之氏の『私訳 歎異抄』や、明治大学教授の齋藤孝氏の「声に出して読みたい日本語 歎異抄」を刊行するなど、『歎異抄』は「悩める現代人にも生きるヒントを与える書」(朝日新聞、同日付)として、いまも根強い人気がある▼親鸞仏教センターの『歎異

「アンジャリの会」(anjalī 個人購読) 入会者募集中!

「anjalī」(合掌の意味・年2回発行)の個人購読を受け付けています。ぜひ、「アンジャリの会」にご入会いただき、ご購読ください。

◆年会費 1,000円(送料込)

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7 親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

親鸞仏教センター

検索

shinran-bc.tomo-net.or.jp

抄』の現代語訳については、すでに各方面から「一冊の本としてまとめて出版してほしい」との要望が寄せられていたが、いよいよ今夏、朝日新聞出版から親鸞仏教センター編集の『現代語訳 歎異抄』(仮題・単行本)として刊行できるよう、最終作業を進めている。憶えば、月2〜3回の定例研究会での5年半に及ぶ共同作業は、2時間テープで約70本とあった。『歎異抄』の一言一言を丁寧に現代語訳するのであるが、研究会が進むにつれて、難問にぶち当たったことも幾度となくあった。当時の研究会主宰者である武田定光氏(元嘱託研究員)は、「宗教語を現代語に意識することは本質的に不可能である。その不可能さを知りつつ、現代語に意識するにはどうしても翻訳をおこなうことになる。単に古語を現代語に意識しただけでは済まない問題が起こってくる。そうすると、宗教語を現代の思想用語から意味づけて翻訳する作業になる」(『歎異抄』の現代語訳を終えて(本紙第22号))。さらに、もう一つの問題は、「翻訳作業は個人でおこなうもので、共同作業には限界があるのではない」という問題がある。個人訳は、ひとえに個人の読み込みによる傾向がある。それが魅力でもある。その点、共同訳は個人への偏りが修正されるが、思い切った訳語が付けにくいという問題も起こる(同)ことであると。同時に、「宗教学者の藤本平也先生からは、共同で意識作業をおこなうことで、『共同としての個』というものが誕生するのだ、と教えていただいた(同)との言葉を残している▼今回の『現代語訳 歎異抄』(仮題)の特徴は、『歎異抄』の原文から、現代語訳が紡ぎ出されるに至る議論の過程をたどりながら、就中、特に注目した箇所を各条ごとに抽出し、その言葉をめぐってなされた会話のやり取りを整理した。現代人はいま、生きることを感じさせてくれる本当の依りどころを求めて止まない、そんな時代である。だからこそ、闇に包まれた時代の問題や課題を問うて生きる人間に、『歎異抄』が呼びかけてくる「生きた言葉」「響く言葉」を発信していきたいのである。上梓の晩には、一般書店に並ぶこととなるが、持ち歩ける座右の一冊として、ぜひこの『現代語訳 歎異抄』をご愛読・ご推薦いただきたい。(長谷岡)